

### 3. 浦安「まちづくりブック」の制作活動

浦安「まちづくりブック」をつくる会  
(千葉県浦安市)

#### I. 活動の背景

まちづくりには、まちに关心を抱き、まちの将来を豊かにイメージできて、現状が抱える課題をどのように解決できるかを知る市民の存在が不可欠である。しかしまちづくりのための学習は、いまだ体系だって行われてはおらず、自主的に学ぼうにも、適切な教材はほとんど見あたらない。そのため、まちや都市への知識や关心は、必ずしも市民の中に豊かに蓄積されているとは言えない。

このような現状に危機感を抱いた浦安市在住の専門家（まちづくり関連）が自発的に集まり、まちの見方やまちづくりの考え方を分かり易く伝える教材「まちづくりブック・浦安（以下まちブックと略す）」づくりの活動をはじめたのが、1996年9月である。

#### II. 「まちづくりブック・浦安」の制作経緯

まちブックの制作は、1) 中学生にも理解できること 2) まちづくりの意味・本質を伝えること 3) 実際の浦安のまちを題材とすること 4) 読み手・使い手が制作に参加することを原則に進められ、現在（1999年4月）、表1に示す内容・構成が固まった。

表1:「浦安まちづくりぶっく」の構成と概要

まちのなりたち	まちと人とのかかわり
第1章 まちに流れる時間:まちの歴史 5つのまちの成り立ちと今・埋め立て秘話	第7章 海とかかわる:海に親しむ 海の名残・海の自然・海を楽しむ・海とのつきあい方
まちの計画	第8章 まちを使い込む:まちの成熟
第2章 都市を計画する:都市計画 土地利用・都市施設計画・つくり替え・地区計画	まちの居場所・まちの成熟・見立て 第9章 集まって住むこと:集住ルール
まちの仕組み・まちの要素	集まるることを楽しむ・集住のルール・コミュニティ
第3章 いろいろな建物がまちなみをつくる:建物・街なみ 建物の形・単体規定・集団規定・建築協定	第10章 まちを育てる:市民参加 まちづくりと時間・合意形成・みんなで考える楽しさ
第4章 みちの役割:みちの種類 道の構成・快適な生活空間としての道・道の地下の利用	まちの災害への備え 第11章 防災とまちづくり:都市防災
第5章 都市と自然をつなぐ緑:都市の緑 都市の生態系・街路樹・公園・みどりを育む	地震と防災・震災がおきたら・復興に向けて
第6章 堤防にまもられたまち:都市と河川 堤防・治水・利水・親水・環境としての水へ	

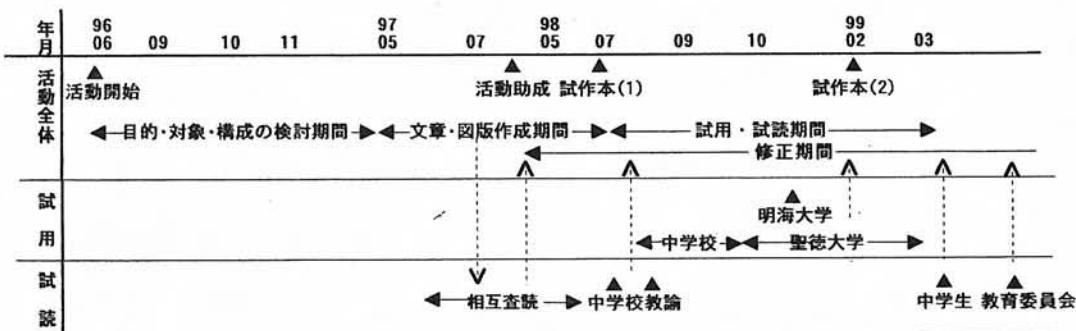


図1 活動の経緯

この間の経緯は図1に示す通りであるが、まちブック制作の特徴を最もよく示すのが、一次試作本ができる後の一ヶ月間（1998年5月～1999年4月）に行われた、試用・試読の活動である。試用とは、試作ブックを実際に使用しながら、あるいは使用してもらいつながら、その内容や構成についての検討を加えるとともに、使用方法の開発や使用場面の開拓などを目的として行われた活動。試読とは、試作ブックを想定読者に読んでもらいながら、内容についての関心・理解の度合いを測ったり、表現の適否について検討することなどを目的として行われた活動である。いずれも制作原則の4) 読み手・使い手が制作に参加すること、および1) 中学生にも理解できることに根差した活動である。

### III. 試読・使用の方法と結果

まちブックの制作過程では、二冊の試用本がつくられ、三タイプの試用と二タイプの試読がおこなわれた。ここでは、それぞれの試用・試読の目的、方法、結果について概説する。

#### 1) 中学校社会科での試用

中学校社会科における試用の主な目的は、1.授業教材としての使用可能性 2.まちブックを使用した授業方法・内容 3.中学生の内容・表現への興味・関心 を検討することにあった。

浦安市立H中学校の2年生が履修する、社会科地理的分野「身近な地域」単元の授業で協力をえて、全3クラスの授業において試用を行った。問題発見・調査などの活動を経た後、まちブックの1章および10章の一部を配布。教諭が補足解説をするなか、中学生の反応を観察した。この社会科での使用によって明らかになったのは、以下の2点である。

①「新旧の市街地の景観の違いを感じていたがその理由がわかった」「まちが計画的に作られていたことがわかった」等の発言には、地域の学習が生徒たちの関心をよび、まちそのものへの意識に育つ可能性が見てとれた。また、特に自分たちの住まいやその周辺の具体的な記述に強い関心が集まり、その後に概念的な解説や計画理念が理解されていく傾向が観察された。

②現行の中学校社会科の単元の中でも、まちブック活用の可能性があることが確認された。ただし、授業の中で全面的にまちブックを取り上げていくことは、現行の指導要領の範囲を大きく逸脱し不可能であること。しかし資料教材としては、極めて有用性が高いことが指摘された。

#### 2) 大学における長期試用

聖徳大学における長期試用のねらいは、1.大学授業教材としての有用性 2.まちブックを用いた、半期（5ヶ月）の授業方法・内容・構成 3.浦安を知らない学生の、内容への関心・理解 を検討することであった。試用は短期大学部生活空間デザインコースの「集住生活論」授業として行い、まちブックをテキストとして半期を通じた授業展開行った。最終課題を提出した11人に対してアンケートを実施。アンケートは各章ごとに「A.解りやすい／B.難しい」「A.興味がもてた／B.つまらなかった」の二者択一で評価させるとともに、特に興味をもった章に○、これに次ぐ章に○を付けさせ（M.A.）、○に2倍の重みを付けて総合評価とした。（図2）

聖徳大学での試用によって得られた結果は、以下のとおりである。

①解りやすさと興味深さはともに似た分布を示し、1章まちの歴史は、評価が高く、都市の基本的事項を説明した2～5章は、興味深いが解りにくい。現地のやや特殊な側面を記述

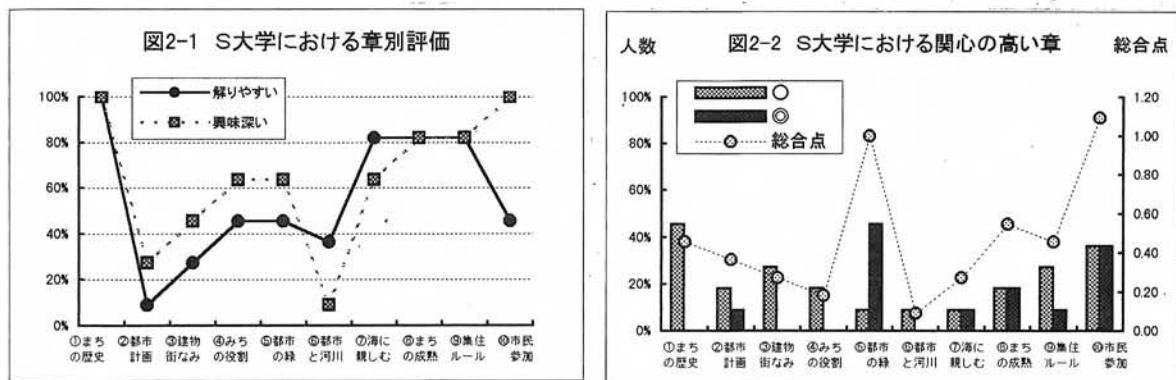
した6・7章は、解りやすいが興味を持ちにくい。市民としての参加と責任を解説した10章は、難解であるものの関心が高い、という評価を得た。

②これらの評価より、事前知識が少ない段階でも理解しやすい領域（1章まちの歴史等）と、内容的には難しくても情報が求められている領域（10章市民参加等）が存在することが判った。

③アンケートに添えられた自由回答欄には、「本を読んで見学に行き、見学に行って授業を受けることで、想像したまちと実際に見たまちが活き活きと感じられた」「私も自分のまちについて調べてみたら自分が好きになると思った」「まちに対して一方的に望むのではなく、住民一人一人が町のために動くことが大切だ」ということが分かった」など、新鮮な感想が寄せられており、試用者のまちへの意識を高める効果があったことが見てとれる。

④中学生を対象としながらも、成人市民に有効に活用し得ることが確認された。また、地縁の有無も、特に大きな問題ではないことが確認できた。

⑤しかし、一定の理解水準を得るために丹念な解説と補足説明が必要である事も分かった。



### 3) 大学における短期試用

明海大学の不動産学部における試用は、1. 将来のまちづくりに係わる専門家を育成している講義での利用可能性、2. 浦安のまちを知っている大学生(当大学は浦安に立地)の眼を通しての内容の検討、3. 3回の授業での短期利用の可能性 4. フィールドワークとの併用の可能性 を検討することにあった。

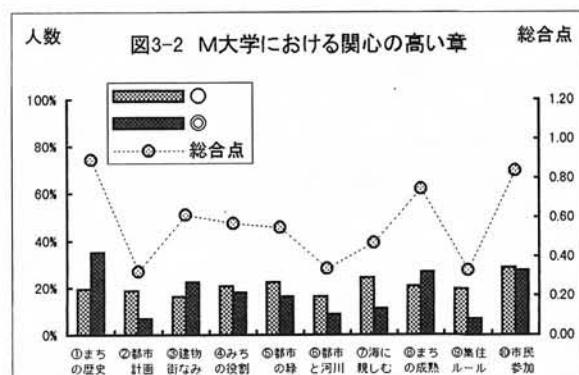
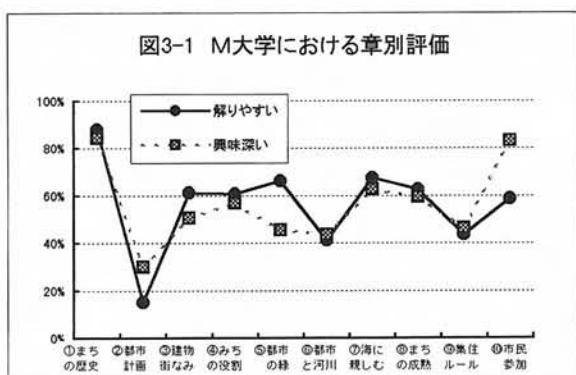
授業では現状をスライドで見せ、その上でまちブックを配布した。また、まちブックを事前に読んだ上で、浦安ウォーキングツアーを98年11月14日に行い（参加学生120名）、ツアー後、まちブックの試作本に対してのアンケートを実施し、独自ツアー参加者を含め163名の回答があった。アンケート内容・方法は2)と同様である。

明海大学での試用を通して分かったことは、以下である。

- ①歴史、まちを育てる、まちを使い込むなど、まちの形態に直接的触れるものではなく、そこでどう人が住んでいたか。どう暮らすのか。どう育てるのか。という、まちづくりのソフト的な側面への評価が高いことがわかった。（図3）都市あるいはまちへの興味が、そこでの人間の生活への興味関心を基礎とするものであることを示す、示唆に富む結果である。
- ②通常、都市計画ではまず形態や安全に係わる項目を教えるが、こうした項目は専門家予備軍の学生でも興味の低いことが分かった。

③自由記入でもとめたコメントには、「この本により、近代的な都市にも長い歴史があることを発見した」「街は生き物だと思った」「住んでいて知っていると思っていたが、知らないことがたくさんあることを発見した」等が多く、浦安に住んでいたり毎日浦安に通っていても、授業で取り扱わない限り、自分のまちに対する関心はさほど高くないことが分かった。

④中学生でも分かることを目指したが、都市計画を専門的に勉強する大学生の入門書としても、予想以上に有用であることが確認された。



#### 4) 教育関係者による試読

教育関係者による試読のねらいは、1.教育の場のなかでの、まちブック使用の可能態  
2.教育の現場で使用する際の内容・表現 3.中学生にとっての内容・表現 の検討にあつた。

中学校教諭と教育委員会主事の2名に試読本を渡し、一定試読期間の後、インタビュー調査を行った結果、以下の4点について指摘がされた。

①「子どもに不必要的コンプレックスを抱かせる表現、内容は避けるべきである」「在住地区の区別感・差別感を助長する表現は避けるべきである」等、表現への教育的配慮が必要が指摘された。

②専門用語の多くが、子どもにとっては難解で、「基本的に一般用語を用いる必要がある。用語として覚えてもらいたいものについては補足説明をする必要がある」との指摘がなされた。

③学校教育の中で用いる可能性としては、社会科、道徳、家庭科、理科の副教材としてだけではなく、選択教科の中での社会科、総合的な学習時間でも活用できそうだ、との指摘があった。

④試読本の内容は、十分に中学生の理解の範囲であり、興味・関心をもって読むであろう、との意見がだされた。

#### 5) 中学生による試読

中学生試読の目的は、1.想定読者とした中学生の内容への理解 2.用語・表現の適切さ  
3.中学生の内容への関心 を知ることにあった。

試読原稿を中学校を通じて生徒に手渡し、その3日後にワークショップ形式で試読結果の調査を行った。旧市街、新市街の中学校から一校ずつ選定し、参加する生徒の選定は中学校の教諭に一任し、各校5人、計10人の参加があった。中学生の試読の結果は、以下の

3点に集約される。

- ①内容についての理解は、予想をはるかに超えるものであった。しかし、専門用語の難解さが再三指摘された。またルビが多く、かえって読みにくくなっているとの指摘があった。
- ②関心の所在を大学での試用の結果と比較すると、中学生の関心は第8・9章のような人とまち、人と人とのつながりをテーマにした章に集まった。
- ③「ふだん、あまりまちについては考えていなかったが、この本を読んで、まちって面白いとおもった」「もっと、まちのことを知りたいと思った」など、中学生もこのような本に触れることで、まちへの興味・関心が覚醒されることがわかった。



中学校での試読



打ち合わせ風景

#### IV. まちブック制作における試用・試読の意義

まちブックの制作過程でおこなった試用・試読は、まちブックにとっても、製作者にとっても、また試用・試読の参加者にとっても、極めて大きな意義があった。

二大学での試用や、中学生・教育関係者による試読結果は、一部の章の全面書き直しを含む、原稿・図版の手直しというかたちで、忠実にまちブックに還元された。この試読・試用から手直し、再度の試読から再度の手直し、という長い過程を経たことで、まちブックは専門家の「一人よがり」ではない本、「利用者・読者の視点」を備えた本へと、近づくことができた。

また試用を通して、使用場面の具体的検討や使用方法の開発が行えたことは、まちブックの制作が「作って終わり」の本づくりではなく、制作過程に完成後の「読まれること・使われること」があらかじめ組み込まれた本づくりとなったことを意味しよう。

製作者にとって試用・試読は、「専門家」がいかに「市民」から離れているかを確認する、たいへんに良い機会となった。なかでも中学生に再三、用語の難解さについて指摘され、それを平易な用語に置き換えるのにも大変な困難を伴ったことは、専門家の欠点を強く自覚させられた。また、中学生などの眼を通して我がまち、我が仕事を改めて見直したことは、それまでの「専門家」から、生活者としての確かな眼を内在させた「専門家市民」へと脱皮する、大きな一歩となった。

参加者にとってまちブックの試用・試読が、まち・まちづくりに対する新たな眼を開く機会となったことは、望外の喜びである。加えて、ワークショップ方式で実施された中学生試読会では、異なる学校に通う中学生同士の意見交換が活発におこなわれたことや、中

学生たちが本作りに参加したという自負が持てたことも、試読の成果としてあげておきたい。

今後は、試用・試読の結果を受けて、現在すすめている文章・図版の書き直し、修正作業を終え、八月中には発刊の運びとしたい（彰国社から発刊の予定）。またその後は、この本を一人でも多くの市民の読んでもらえるように、各種組織・団体などに持ち込むと同時に、まちづくり講座などを開催し活用を図る予定である。また、教育の現場で取り上げてもらえるように、まずは小・中学校の先生方に、この本の趣旨や活用の仕方などを説明する機会を、ぜひとも持ちたいと考えている。



大学でのフィールドワーク